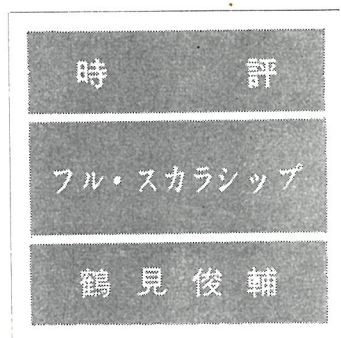




数日前、マサチューセツ州のコンコードにあるミドルセックス・スクールという予備校から手紙が来て、奨学金をふやすために寄付をしてほしいといってきた。この学校は、二十六年まえに私が一年いたところだ。そこで

は、百人ほどの生徒のうち十人くらいが奨学金をうけていた。これらの生徒たちは、大学に入ってから、奨学金をうけつづけたようである。

自分たちのこともをしっかりとした人間にそでるために、社会のよりひろい層から、勉強すべきの少年たちに来てもらって一緒に勉強してもらいたいと考えた。こうして考え方の中には、アメリカのブルジョワ階級のもつ一種のあつみがある。だいたい、アメリカ人は他人のこどもでも、こどものうちは自由にしかって共同でしつける。こどもは社会の次の代をになうものだから、それにたいして、共同で責任を負わねばならぬという考え方があつた。

はなしが飛んでしまふが、これとあわせて、日本の軍隊のことを思い出す。

日本の軍隊は、階級とか学歴ぬきであらゆる種類の日本人をよせて、芋あらいのような状態につきおとして教育する機関である。私

は、戦争中、軍隊のなかでしばらくくらしたことを、得がたい体験の一つと思つてゐる。そこでは、私がハーヴァード大学を出ていることは、より多くなぐられることの条件にしかならなかつた。私にとっては、軍隊のデモクラシーほど、日本のデモクラシーを感じさせるところは、なかつた。戦争のための器械として用いられる軍隊には反対だが、このように日本社会のあらゆるカマチから青年をひきだして、芋あらいの状態におくのは、国民的なコミュニケーションを活発にする上で、とてもよいことだと思ふ。そういう成人教育の場がなくなつたことが残念だ。

同志社は、アメリカの私立学校とも戦前の日本の軍隊とも似ていない、勉強をするための機関が、戦争をするための機関に似ていないことは仕合せだし、日本の学校がアメリカ式でないことはよいことだと思ふ。だが同時に、ゆたかな階級の青年が自分たちのあいだだけで話したり考えたりしているときの焦点のないほがらかさを、同志社の内の中に時々見るのは残念だ。

授業料の値上げをすることが、この状態をさらに濃くするようだと困る。学生の数をふやすことで、授業料の値上げをあるていどにおさえることができるなら、それやむを得ないと思ふ。だが、授業料が現在のレベルにあつても、すでに、焦点のないほがらかさが相当あるとすれば、それは、どうすればよいのか。完全な奨学金をつくる方向に、ふみだすことが、一つの解決の方向だと思ふ。炭坑の失業者の家庭からでも、漁村・山村からでも、向学心と社会奉仕の志のある有能な少年少女が、同志社ならば自分をうけいれてくれ

るであらうと考えてあつてくるような大学になつたらいいと思う。そうした少年少女が、自分の両親にすこしの負担をかけることもなく、衣服をととのえ、宿舍と食事をあたえられて勉強できるようになつたら、その影響は、同志社の学生全体におよぶことになるし、学生運動のレベルも高まつてゆくと思う。一学年に十人の学生としても、十年には百人になる。その学生たちが社会人になってからの活動が日本の社会に根づくときには、同志社と日本現代との結びつきが、明治中期および後期の同志社のかげやかしい時代以上につよくいきいきしたものになるだろう。

C・P・スノウの伝記をよむと、スノウは貧しい家庭にうまれたためにまず自然科学の勉強をして、奨学金を得て大学まで終えた。しかし彼の少年のころからの志は、小説をかくことにあつた。自然科学者として相当の仕事をした後、彼は実験室をはなれ、科学者としての第一線の仕事をはなれて、科学行政の職につき、官吏として手腕をふるい、こうしてうまれた余暇を用いて、小説と書くに至る。このようにして、自然科学、行政、創作の三つの分野にわたる多面的な才能が育てられた。実験科学という文化と人文的教養という文化との、二つの文化の交流を計る役割を、彼はみずからの生涯に課した。このような才能の成長は、奨学金の制度ときりはなしては考えられない。スノウになり得る才能は、日本の隅々にあると思われるのだが、それらを、進んで開発する機関に、同志社がなれないだろうか。

スノウと正反対の育ちかたをした人を、知っている。昭和十七年

の六月十日にニューヨークを出た捕虜交換船で、角谷静夫という数学者とのりあわせて、八月二日に日本につくまで二ヶ月半、寝食をともにしたことがある。この人は、学問の話以外、ほとんど何もなかった。甲板で「無限の比較」について講義をしているときなど、甲板を女性がとうりすぎたりすると、われわれの眼はしげんにそちらに向つて動くものだが、そういうときでも、彼は眼を動かすこともなかった。私は、はじめて天才というものに出会つたと思ったが、天才というのは退屈なものだとも思った。

角谷さんは、うまれてから今日まで、入学試験というものを受けなかったが、うまい。競争を知らず、のんびりと、自分の好きなことを勉強しているうちに今のようになつた。幼稚園が甲南、そこで小学校、中学校、高等学校（七年制）を終え、そのころ数学が好きになつたが、高校の文科から大学の理科にいれてくれるのは東北帝大しかないので、そこにいった。そこも無試験入学。阪大につめているときに書いた論文が（俗説ではアインシュタイン、実はノイマンだつたらう、に）認められてプリンストン高等科学研究所に選ばれた。戦時中は日本に帰つてしたが、敗戦後またアメリカにまねかれて、今はエール大学の教授である。

ゆたかに育つた故に、同時代の流行にまどわされず、人類に本質的な問題を追つてゆくのにびりさ——それに、焦点のないぼがらかさを切りかえられないか。角谷さんのような育ちかたとスノウのような育ちかたがともに試みられる場所に、同志社がなつてほしい。時評からはずれてしまつたが、授業料値上げ反対闘争について感じたことを書いた。

（文学部教授・社会思想史）